

# ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第十八号

Jeff Pippenger

2025-12-25

## 第十八番

私たちはアブラムの契約を考察しているが、ヨエル書の冒頭の数節と直接結び付くアブラムの預言の要素については、まだ取り上げていない。アブラムの400年の奴隷状態の預言にパウロの言う430年を加えると、ダニエル書12章11節の1290年に一致する預言的構造が生み出される。11節の1290年の預言は、アブラムとパウロが示す430年のラインにおけるオメガの預言期間である。この真理は、終わりの日に封印が解かれて賢い者と悪しき者を分けるものの一要素である。

430年のオメガの預言には「四代」という象徴が結び付けられており、神の選民を束縛下に置いた国家に与えられた猶予の期間を指し示している。モーセの場合はそれがエジプトであり、モーセの歌を歌う十四万四千人の場合は、1798年から日曜法に至るまでのアメリカ合衆国の歴史である。黙示録十三章で「地の獣」として表されるアメリカ合衆国は、小羊として始まり、最後には竜のように語る。小羊の象徴であるヨセフは、新しいファラオが現れて束縛が始まるまでの、エジプトにおける相対的平和の時代を表している。ゆえに、第四代において裁かれる国、モーセにとってはエジプトであったその国は、アメリカ合衆国である。ヘブル人にとっては戸口の門柱に付けられた血によって頂点に達し、さらに紅海ではエジプトという国家に対して頂点に達した災いによって型示されているように、残りの民は日曜法において裁かれる。ヨセフとモーセは良いファラオと悪いファラオを表しており、アメリカ合衆国においては、まず小羊、そしてその後には竜である。

第四世代における裁きについてのアブラムの預言には、恩恵期間の終わりが段階的であるという事実が含まれていた。なぜなら、モーセによるアブラムの預言の成就の中では、エジプトに対する恩恵期間が閉じられただけでなく、エジプトが自分たちの杯を満たした後も、アモリ人が自分たちの恩恵期間の杯を満たすための時間がなお残されていたからである。エジプトにとっての紅海はアメリカ合衆国にとっての日曜法であり、その後は、エジプトの恩恵期間の終わり以後のアモリ人が表しているように、「地球上の他のすべての国々」がアメリカ合衆国の「その例に倣う」ことになる。

アモリ人は、アブラムの契約において、エジプトの川からバビロンの川に至る世界を示す十の部族の一つであり、したがって、アモリ人は、合衆国における日曜法の後に、国家としてのそれぞれの猶予期間を閉じる世界の諸国民を表す。アモリ人は、世界に対する裁きが閉じることの聖書的象徴であり、それは第三世代と第四世代に起こる。紅海は、合衆国にとっての猶予期間の終結の象徴であり、アモリ人は、人類の猶予期間が閉じるまで、諸国が段階的にその猶予期間を閉じていくことを表している。したがって、アモリ人は、紅海における日曜法の危機から東風による解放に至るまで、すなわち神の民に救いの道が開かれるときの象徴である。

しかし、アブラムの預言は、アメリカ合衆国をエジプト、世界をアモリ人に見立てる観点から第四世代を論じるだけでなく、より重要なことに、紅海を渡る神の民の世代を「第四世代」と位置づけている。アブラムの三段階のうち第一段階に見られる「四世代」という理解から引き出せるだけの事柄を引き出したなら、アブラハムの契約の第二段階と第三段階を検討する。第二段階は第十七章、第三段階はもちろん第二十二章である。

ダニエル書12章では、三つの預言的期間が示されており、それらはすべて1844年に終結した預言的な時を表している。これら三つの期間は終わりの時に封印が解かれ、また終わりの時に神の民にもたらされる知識の増し加わりを表している。亜麻布を着た人としてのキリストは、7節でその三つの預言的期間の最初のものを示し、そのことによって、水の上ではなく地と海の上に立つ黙示録10章の天使と歩調を合わせている。

また、私が海の上と地の上に立っているのを見た御使いは、天に向かって手を上げ、とこしえに生きておられる方、すなわち天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方にかけて誓った。「もはや時はない。」黙示録 10:5, 6.

第12章7節では、亜麻布をまとった人も、永遠に生きておられる方にかけて誓っている。

そして私は、川の水の上にいる亜麻布をまとった人が、右手と左手を天に上げ、永遠に生きておられる方にかけて誓って言うのを聞いた。「それは一つの時と二つの時と半分の時であり、聖なる民の力を打ち砕き散らすことが成し遂げられるとき、これらのすべての事は終わる」と。ダニエル書12章7節。

私たちは靈感によって、ダニエル書に見いだされる同じ預言の筋が黙示録で取り上げられていることを知らされており、ミラー派の理解では、これら二つの記述はキリストに関する並行する箇所である。すなわち、黙示録では小さな巻物を手にした御使いとしてのキリストが、預言的期間の適用が1844年に終わることを示し、ダニエル書では亜麻布をまとった人としてのキリストが、アメリカ合衆国において日曜法が到来するとき、ダニエルの最後の幻のすべての驚異が完了することを示している。その聖なる歴史の中で—それは日曜法に先立ち、最終的にそれにおいて頂点に達するが—神の民は、1260という象徴で表される期間、散らされることになっていた。日曜法に先立つこの散らしの期間は黙示録第十一章に示されており、そこではモーセとエリヤが殺され、三日半の間、通りで死んだままであるが、これは1260の象徴である。

第七節で、亜麻布を着た人は、聖なる民の力が散らされることが三日半を終えるとき、終わりの時代の神の民に降りかかる「驚異」は終わるのだと明らかにしている。前回の記事は、ホワイト姉妹によるゼカリヤ書第3章の注解で締めくくった。冒頭の一文は、「ゼカリヤが見たヨシュアと御使いの幻は、大いなる贖罪の日の終幕の場面における神の民の経験に、特別な力をもって適用される」と述べていた。その章においても、またホワイト姉妹が靈感によって施した同章の注解においても、十四万四千人は「人々の驚きの的となった者たち」である。日曜法によって完了させられるダニエルの最後の幻の「驚異」は、神の民の封印に伴う「驚異」である。

ダニエル書12章は、終わりの時に十四万四千人に印を押す光を与える。その光は、ミラー派の歴史の中で真理として認められ確立された三つの予言的期間によって表されている。その三つの期間は三つの節に示されており、真理の構造を支える三本の柱である。真理の構造は三段階の過程によって支えられている。その三段階の過程は、九つの節（4～12節）からなる箇所の中で、予言的な時を示す三つの節によって表されている。それらの三つの予言的期間をミラー派の基礎的理解に立って考えると、ミラー派の理解と一致して定義されつつも時間の要素を伴わない三つの象徴的期間が導き出される。

三つの期間は、預言が「封じられ、そして解かれる」過程を定義し、三重の試練の過程についての古典的な聖書の記述も含む、まさにその聖書の箇所の中に位置している。ダニエルが自分の書を封じるよう告げられるところから始まる九つの節は、三つの期間が提示されているまさにその節であり、またその九節の中で、真理が解かれるときに成し遂げられる浄化の過程は「清められ、白くされ、試みられる」と表現されている。三つの節に示されている三つの期間は、知識の増加、終わりの時、後の日を指し、神の契約の民に対する最終的な試練と封印の過程を表している。その歴史の中で、終わりの日に神の民に降りかかる象徴的な「驚異」が示されている。どうかこの段落をもう一度お読みください。

九節から成る箇所のうち三つの節に記された三つの期間は、ダニエル書の頂点を表しており、そこに示される頂点は内的な預言の流れの頂点である。これは、手によらずに山から岩が「切り出される」物語であり、すなわち残りの者の物語である。その内的な流れは十章と十二章に表されており、外的な預言の流れの頂点は十一章の結びの節々と、ダニエル書十二章の冒頭の数節にある。

それら三つの期間は、ウライ川とヒデケル川の証しに関する双方の幻のクライマックスでもあり、その三つの節には、契約の時の預言の最高潮の成就を表す予言的期間が含まれていて、その預言はアブラムとパウロの両者を証人として示している。亜麻布をまとった人としてのイエスは七節におり、水の上を歩いている。十一節では二つの声があり、それらはキリストの声でもあって、アブラムとパウロが立って証しする。十二節には神の民の封印の歴史が表されている。というのも、十四万四千人はおとめであり、おとめは十人のおとめのたとえを経験し、また十二節の祝福は待ち望む者たちに与えられるからである。たとえの中で「幸い」とされる待ち望む者たちは、戸が閉じられるときに婚礼に入ることを許す衣を受ける者たちである。

第七節では、イエスが水の上を歩いておられ、そのことは恐れを生じさせる。しかしペテロは信じることを決心し、歩み始めて神に栄光を帰した。だがペテロはしばしば両陣営の象徴であり、彼の裁きの時が到来すると、栄光は再び恐れへと変わる。第七節に見いだされる最初の時期は、第一の天使のメッセージを表している。イエスは水の上におられ、これは恐れと第一の天使を象徴している。次いでイエスは、日曜法の裁きに先立ってご自分の民に栄光をお与えになる時期を指し示される。三天使のメッセージの三つの要素はすべて第七節の中にある。というのも、第七節は三天使を表す三つの節のうちの最初のものだからである。

第十一節は、アブラムとパウロというアルファの声に対するオメガの証しによって、「二重化」を示している。彼らの「重ねられた」声は合わさって契約の時の預言を明らかにし、第十一節は、1798年のバビロンの倒壊で終わる預言的期間を特定することによってオメガとしてその預言を成就し、こうして終わりの日にミカエルが立ち上がる時のバビロンの倒壊を型取っている。第十一節には預言者の二重化があり、またバビロンの二度の倒壊を表す期間が示されている。したがって、「バビロンは倒れた、倒れた」と告げた第二の天使のメッセージを表している。

第七節は第一の天使のメッセージであり、第十一節は第二の天使のメッセージ、そして第十二節は、すなわちダニエル書12\*12、あるいはダニエル書144であり、賢い者と愚かな者の区別について述べている。これは、審判の危機において品性が顕現して終わる審判の過程の中で成し遂げられる。第十二節は、世界が二つの階級に分けられるあり方を明らかにする第三の天使のメッセージであり、その同じ分割の第三の天使による外的な描写の対応物は、第十二節に示される第三の天使の内的な分割である。第七節、第十一節、第十二節は三天使のメッセージであり、これらの節は終わりの時に封印が解かれる光である。終わりの時にこれら三つの節の封印が解かれることは、黙示録第十章と一致する。

第十章において、強い御使いとして、またユダ族の獅子としてのキリストは、「獅子」のように叫び、その咆哮によって七つの雷鳴が生じ、それらはダニエル書第十章がそうであったように封じられた。これらは平行する記述である。この理由から、第十二章の三つの期間は、黙示録第十章の七つの雷鳴でもある。

「七つの雷」は、アルファでありオメガであるキリストを表す別の表現にすぎない。というのも、「七つの雷」の主要な象徴は、1798年から1844年に起こった出来事の筋道を示しており、それが「将来の出来事」の中で「その順序に従って明らかにされる」かたちで、十四万四千人の歴史において繰り返される、という点にあるからである。したがって、「七つの雷」はアルファとオメガの象徴であり、また始めであり終わり、最初であり最後、基礎であり神殿、礎石であり頂石-すなわち七つの雷である。

ダニエル書12章にある三つの象徴的な期間の光は、七つの雷の光と一致しなければならない。というのも、それらは同一の預言の系列だからである。第一の期間において、キリストは両手を天に挙げるが、これは黙示録10章で片手でそうされるのと同様である。黙示録10章では、その御手は預言的な時の適用の終わりの象徴となり、時を含む預言期間から単なる預言期間への移行を画する。ミラー派が用いた主要な預言の規則におけるその転換は、キリストの時代における文字的理解から霊的理解への大いなる転換によって型示されていた。

使徒パウロは、選ばれた民の預言的系譜に関わる主要な預言的原則を打ち立てるために立てられた。霊的イスラエルの最初期に、契約そのものを再定義する主要な預言的原則が確立された。その時以後、アブラハムの子であることは、血によってではなく、信仰によってアブラハムの子となることを意味した。その預言的原則は、主としてパウロの筆を通して打ち立てられ、この点で彼は黙示録第十章のキリストを象徴し、1844年に時に関する預言的適用を変更し、終結させた。

人類との契約は虹によって象徴され、ノアの箱舟は、洪水の前後に明確に特定された選民が存在しなかった時期を象徴している。アブラハムへの召しは、神と人類との預言的關係における重大な変化を示した。アブラハムと結ばれた契約は、契約史の流れにおける大きな転換を意味し、そのことによって、パウロの時代における文字的理解から霊的理解への大きな転換を予表し、さらに1844年における時の適用から時の非適用への転換をも象徴した。

神が人類と結ばれた契約における最初の転換点はエデンの園であり、顕著な変化はいのちの木への制限であった。また、それは衣に変化をもたらし、霊的な光の衣から文字どおりの子羊の皮へと変わった。契約史における次の大きな転換は洪水であり、最初の大きな契約の転換でアダムがそうであったように、ノアがそれを代表する。ついで、アブラムとともに選ばれた民への転換が起こり、それはモーセへとつながる。モーセは、一日が一年を表すという預言の原則を導入する。その原則は1844年まで有効であり、その時にもう一つの大きな契約の転換があった。契約史の大いなる画期にはいつも、神の預言の御言葉の原則における大きな転換が存在する。十四万四千人の歴史におけるその転換は、アルファ・オメガが真理であるということだ。アルファとオメガとは、神の御言葉において、終わりが常に初めによって例証されるという原則である。そのアルファ・オメガの原則に結びついているのが、ヘブライ語の「真理」という語の三重の構造である。

残りの民の歴史における主要な預言的転換は、主要な各契約の歴史の中で直接に表されており、他の真理の筋道においても同様である。イザヤ書22章22節でエルヤキムの肩に置かれる「鍵」は、マタイ16章でパニウムにおいてペテロに与えられた鍵と同じものである。その鍵はフィラデルフィアの教会に与えられている。そして、ミラー派の歴史を型どったモーセの歴史の中でモーセによって記された、まさに一日を一年とする原則と彼が結びつくことを可能にした鍵を与えられたのが、ウィリアム・ミラーであった。ミラーとモーセの預言との結びつきは、パウロとアブラムの預言との結びつきによって表されていた。そもそもミラーがモーセと結びつかないはずがない。両方の契約を結び合わせるために、箱に入れられて救われたモーセの救いは、箱舟で救われたノアの救いと結びつけられていたのだから。エデンで始まる預言の適用の転換は、終末の契約の民、すなわち十四万四千人の歴史において、重大な預言の光の啓示が示されることを明らかにしている。私は、主要な預言の転換は七つの雷によって表されており、それはダニエル書十二章の三つの期間と直接結びついていると主張する。そしてこれは、真理の三段階構造の上に立つ「行に行、規則に規則」の適用においてアルファとオメガの原則を用いるときにのみ認識される。

「時はもはやない」という宣言の直前の節において、キリストは七つの雷を示されたが、それらはダニエル書12章の真理と同様に封印された。12章で亜麻布の衣を着て両手を上げている人に関する文脈はダニエル書の封印が解かれることであり、黙示録10章における獅子なるキリストに関する文脈は七つの雷の封印である。ホワイト夫人は、七つの雷の封印をダニエル書の封印と対応させている。

この七つの雷がその声を発したのち、小さな書について、ダニエルと同様に、ヨハネに命令が下る。「七つの雷が語った事柄を封じよ。」これらは、順を追って明らかにされる将来の出来事に関するものである。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解

第7巻、971ページ.

七つの雷は、黙示録10章と「預言の霊」、そして1840年から1844年までのミラー派の歴史によって定義されており、この歴史は十四万四千人の歴史の中で繰り返される。同じ箇所にはこう記されている。「七つの雷に表された、ヨハネに与えられた特別な光は、第一と第二の天使のメッセージのもとで起こる出来事の描写であった。人々がこれらのことを知るのは最善ではなかった。というのも、彼らの信仰は必然的に試されなければならなかったからである。神の秩序において、最も驚くべき、そして進んだ真理が宣べ伝えられるであろう。」ミラー派は、自分たちが二度の失望に直面することになるとは理解していなかった。というのも、彼らの理解不足そのものが彼らを試すために意図されていたからである。ミラー派は「進んだ真理」を何ひとつ予期していなかった。つまり、契約史における「重大な予言的転換」を期待していなかったのである。

「これらのことを知ることはミラー派の人々にとって最善ではなかった」とはいえ、十四万四千人も同じ歴史によって試される。ただし、それはその歴史を無邪気に誤解することによってではなく、本来知っていなければならない歴史を理解しないことによってである。同じ試験だが、ただ逆になっているだけだ。黙示録10章のヨハネは、まず第一に十四万四千人を、そして第二にのみ、第一と第二の天使のミラー派運動を表している。これは、ヨハネが小さな書を食べるに先立って、それが甘く、次いで苦くなると前もって知らされているのを見れば分かる。それが何を意味するかをミラー派が知ることは最善ではなかったが、ヨハネは、ミラー派が小さな書を食べたときに何が起こるかを前もって知っている民を表している。

そして私は天使のところへ行き、彼に言った。「その小さな巻物をください。」すると彼は私に言った。「取って食べなさい。それはあなたの腹を苦くするが、口には蜂蜜のように甘いであろう。」そこで私は天使の手から小さな巻物を取って、それを食べた。すると、それは私の口には蜂蜜のように甘かったが、食べ終わるとすぐに、私の腹は苦くなった。黙示録 10:9, 10.

ヨハネは、第10章に描かれている歴史、すなわち1840年から1844年に至る甘くて苦い経験について前もって告げられている。その経験は9節と10節に極めて明瞭に示されており、また2節から4節にもはっきりと示されている。

彼は手に開かれた小さな巻物を持ち、右の足を海に、左の足を陸に置いた。そして獅子がほえたける時のような大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷が声を響かせた。七つの雷が声を響かせたとき、私は書き記そうとしたが、天から声があつて私に言った。「七つの雷が語ったことを封印し、それを書き記してはならない。」黙示録 10:2-4.

「七つの雷鳴」は、第一の天使と第二の天使のもとで起こる「出来事の描写」、そして「順序に従って明らかにされる将来の出来事」を表している。「七つの雷鳴」は、ミラー派の歴史が十四万四千人の歴史において繰り返されるという真理を表しており、また、1798年以降の終わりの時に封印が解かれた諸真理は、神の民の終わりの時における真理の開封を表している。

黙示録10章のイエスは、ダニエル書12章のイエスと一致している。

両方の箇所において、終わりの時に人々を試す真理の封印と開封が提示されている。

ある人々は、第七節ではイエスが語っているが、第十一節と第十二節ではガブリエルがダニエルに語っていると主張するかもしれない。しかし、三つの節すべてでイエスが語っていると理解することもできる。いずれの立場でも、ダニエルを通して語っているのはキリストの声であり、十二章の三つの預言的期間はキリストの言葉で、彼は真理の構造の中にその三つの期間を示している。三つの期間はいずれも封印されており、それらは一つの三重の象徴を成している。

第七節は「驚くべき事柄」の終結を取り上げ、至聖所におけるキリストの最後の働き、すなわち十四万四千人の罪をぬぐい去り、彼らに封印を施すことを特定している。第一節は「驚くべき事柄」を特定しており、三つの節のうち最後の節もまた、「最初の失望を経験しつつ待ち望むがゆえに祝福される者たち」として「驚くべき事柄」を特定している。中央の期間は、日曜法の危機における人類の反逆を示すと同時に、日曜法に至る期間を十四万四千人のための準備の時としても示している。すべての節は、「終わりの日に」ダニエルの民に「起こること」を直接示している。三つの節はいずれも、十四万四千人の清めという主題を語っている。第一の期間は第三の期間と一致し、中間の期間は、全世界がハルマゲドンへと行進する中での反逆を表している。

もしその三つの期間が七つの雷でもあるのなら、その三つの節は「順序どおりに[明らかにされる]将来の出来事」を特定しなければならず、その「将来の出来事」は、1840年から1844年にかけての「第一と第二の天使のもとで起こった出来事の叙述」と一致することになる。この運動が受け入れてきた幾つかの真理は、開拓者の理解とは明確に異なっているが、それでもそれらの真理はすべて開拓者の理解と一致している。

ミラー派の時代から今日に至るまでの間に、預言理解には大きな転換があった。

一日一年の原則は古典的な例だが、ほかにもある。

大きな預言的転換の一例は、七つの雷に関連して示されている。

十章の最後の節でヨハネはもう一度預言しなければならないと告げられ、こうして十章の歴史がミラー派の運動と十四万四千人の双方を表していることが強調されたのち、彼は神殿を測るための測りざおを与えられたが、中庭は除外するようと言われた。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除いて、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みじめるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2.

1844年以降に神殿を測る際、外庭として表されている異邦人は除外するようにとヨハネに告げられている。1844年のこの描写は、神がちょうど新しい契約の花嫁を選ばれたことを示しており、そのとき神の花嫁と外庭との間に区別が設けられた。ホワイト姉妹は、外庭は異邦人を表し、神殿は神に選ばれた民であることを明確に述べている。『The Desire of Ages』の「The Outer Court」という章を読めばわかる。

ヨハネは、1844年に神に選ばれた民となったばかりのミラー派を描き出している。甘くて苦いメッセージを体験したばかりのミラー派と、異邦人として表される名目上のキリスト教界の残りとの間に、区別が設けられた。

1840年から最初の失望に至るまでの間に土台が据えられ、「真夜中の叫び」の宣言の際に神殿が完成した。やがて大いなる失望が起こり、ヨハネには「起きて測れ。ただし異邦人は除外せよ」と告げられる。ヨハネは裁きの開幕を示しており、このため靈感は、これらの節におけるヨハネの測量を調査審判の象徴として適用している。測るという象徴としてのヨハネについて今述べたことは、典型的なアドベンチストの理解と一致しているが、この運動では、その象徴の理解に大きな転換があった。

ミラー派の理解に沿って、ヨハネが第十章で示しているミラー派の歴史の中には、十四万四千となる並行する運動の予言もあることを私たちは見いだした。私たちは、ミラー派の歴史の寸法を取り、異邦人の時を除けば、ヨハネが測っていたまさにその神殿が見えてくることに気づいた。

私たちは、2520年に及ぶ時の預言の一つが1798年に、もう一つが1844年に終わることを知り、その結果、キリストがミラー派の神殿を建てた46年間に明らかになった。ヨハネは中庭を異邦人のものとし、預言的な「異邦人の時」がある。

また、彼らは剣の刃に倒れ、捕囚として万国に連れ去られる。エルサレムは、異邦人の時の満ちるまで、異邦人に踏みにじられる。ルカ 21:24

「異邦人の時」は複数形であり、文字通りのイスラエルと霊的イスラエルが踏みにじられた二つの時期を表している。異教とそれに続く教皇制による二度の踏みにじりのうち、最後のものは1798年に終わった。何が主張されようとも、「異邦人の時」は第一の天使の到来とともに1798年に終わった。ヨハネが測り始めるのは1798年であり、それ以前ではない。彼は1844年の歴史の中に置かれたので、1798年に終わった期間を省くことは外庭を省くこととなり、そうすることによって、契約の使者によってミラー派の神殿が建て上げられた四十六年を明らかにすることになる。この適用からは多くの関連する真理が導かれるが、私はこれを、開拓者たちの理解とは異なるが元来の真理に矛盾せず、もはや時を用いない光の一例として挙げているにすぎない。

その特定の真理は9/11以前に認識されていたが、本当に深く確立されたのは9/11以後である。ヨハネが神殿を測るという真理は「七つの雷」と切り離せない。というのも、まさに同じ箇所だからである。ダニエル書12章の「不思議」が成就する時期まで封じられていた、「七つの雷」の適用に関する真理がある。2023年7月以降に封印が解かれた「七つの雷」の適用は、ダニエル書12章の三つの節と完全に一致し、いや、むしろ深いかたちでそれらを補完している。

シスター・ホワイトは、ダニエル書と黙示録の関係を説明するのに、賛辞ではなく「補完」という語を用いている。補完とは「完全に仕上げること」を意味し、まさにこの二つの預言書が互いに対して行っていることである。2023年7月以降、ダニエル書12章で封印が解かれるとき、七つの雷はそこにあるメッセージを完成させる。七つの雷を開くのは、真理の構造と結びついたアルファとオメガの原則である。

異邦人の「時」は1798年に成就し、異教とそれに続く教皇制が聖所と軍勢を踏みにじった二つの1260年の期間を表している。神殿を測るとき、外庭は除外すべきであり、その外庭は1798年まで及ぶが、1844年以後、時はもはやない。今日では、この1260年は、神殿と

外庭の区別を示す期間を単に表している。この理由により、2020年7月18日から2023年7月に至るまでに、その踏みにじりは成し遂げられた。今日、第一と第二の天使のメッセージのもとで起こった出来事の区分を表す七つの雷と結びつけて神殿を測ることは、ヨハネに与えられた務めである。「私たちの大いなる働き」は、三天使のメッセージを「結合する」ことであり、こうして、それ以前の契約史ではなされず、今でもきわめて稀にしか行われない預言的な働きを明らかにすることである。異邦人の時を表す外庭を除外するとき、私たちは1798年の終わりの時に終結した教皇制による1260年の迫害を除外していることになる。

ミラー派の歴史において46年かけて建立された神殿は、2023年7月から日曜法の直前までの間に建立される神殿を指し示している。その歴史は、「七つの雷」の「将来の出来事」の期間であり、それらは「順序どおりに」「明らかにされる」のであって、「明らかにされるかもしれない」のではない。

第一の天使の歴史を第二の天使のそれと結び合わせると、その歴史はアルファの失望で始まり、オメガの失望で終わることがわかる。1840年から1844年4月19日までの第一の天使の歴史における予言的な道標を、その時に到来し、第三が1844年10月22日に到来するまで続いた第二の天使の道標と整列させると、両者とも天使の到来で始まり、天使の到来で終わる二つの期間が見えてくる。第一から第二に至る歴史は、第二から第三に至る歴史を例証している。

これが妥当な適用であることを裏づける預言的証拠は、その適用のアルファとオメガの中に見いだされる。二本の平行線を合わせて適用すると、両線の始まりと終わりが天使の到来を指し示す。さらに、それらを線に線を重ねて一つの線にまとめると、始まりは最初の失望を、終わりは大いなる失望を示す。終わりが初めよりも大いなるものだと定めるアルファとオメガの原則の中にも、さらなる証拠がある。オメガの大いなる失望で結ばれるアルファの失望は、アルファとオメガにおける小なるものと大なるものの要素を明らかにする。

1844年4月19日から始めると（それは、1844年10月22日に第三の天使の到来へと至る第二の天使の到来である）、さらに第二の線を1840年8月11日から開始してそれが1844年4月19日に終わると、1844年4月19日の失望が、第一と第二の天使の預言の線を組み合わせて生み出される預言の線におけるアルファでありオメガであることが分かる。

その期間の終わりには、第二の天使とともに第三の天使が到来し、それが9/11を型として示すとともに、黙示録18章の力ある天使の二つの声を表している。その二つの声とは、第二と第三の天使のメッセージの双方であり、その二人の天使は1844年10月22日に互いに重なり合い、二つの歴史が行に行を重ねて結び合わされるとき、再び出会う。このように結び合わされることで、それは最初の失望から大失望へと至る歴史を表し、その歴史の中間の道標はミラー派の時代のエクセターのキャンプ集会で、そこで二つの種類の礼拝者が現れ、たとえ話における愚かな乙女たちの反逆を表し、その中間の道標を反逆と位置づけている。

七つの雷は、第一と第二の天使のメッセージを行に行を重ねて結び合わせた歴史を表しており、それによって、十四万四千人の歴史における最初の失望から大失望に至るまで

の歴史が示される。その歴史が預言的に何を表しているかという理解は、「終わりの時まで封じられている」とされるダニエル書12章に示されたメッセージと完全に一致する。

この研究は次の記事で続けますが、終わりの日における神の民についてのダニエルの描写だけを扱っているダニエルの最後の幻の該当部分は、ひとまず取り上げません。初出の原則という文脈で注目すべきは、一節でダニエルがその幻を悟る者の一群に属しているということです。幻で最初に言及されるのは、悟る賢い者としてのダニエルの描写であり、最後の九節はすべて二十二日目における悟る賢い者についての記述です。

ペルシアの王キュロスの第三年に、名をベルテシャツアルと呼ばれていたダニエルに一つの事が啓示された。その事は真実であったが、定められた時は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。

そのころ、私ダニエルはまる三週間、嘆き悲しんでいた。私は美味しいパンを食べず、肉もぶどう酒も口にせず、身に油を塗ることもしなかった。三週間が満ちるまでそうしていた。第一の月の二十四日、私はヒッデケルという大河のほとりにいた。そこで私は目を上げて見ると、なんと、

亜麻布をまとい、腰にはウファズの純金の帯を締めている、ある人がいた。彼の体はまた黄玉のようで、その顔は稲妻のよう、目は火のともしびのようで、腕と足は磨き上げられた青銅に似た色をしており、その語る声は群衆の声のようであった。

そして、わたしダニエルだけがその幻を見た。わたしと共にいた人々はその幻を見なかったが、大いなるおののきが彼らに臨み、彼らは身を隠そうとして逃げ去った。こうして、わたしはひとり取り残され、この大いなる幻を見たが、わたしのうちには力がまったく残らなかった。わたしの容色はわたしの内で損なわれ、わたしは力を保つことができなかった。

それでも私はなお彼の言葉の声を聞いた。私はその声を聞いたとき、顔を地に伏せたまま深い眠りに落ちた。すると、見よ、一つの手が私に触れ、私をひざまずかせ、両手のひらを地につかせた。そして彼は私に言った。

ダニエルよ、大いに愛されている人よ、わたしがあなたに語る言葉を悟り、まっすぐに立ちなさい。今、わたしはあなたのもとに遣わされたのだから。

そして彼がこの言葉を私に語り終えたとき、私は震えながら立っていた。すると彼は私に言った、

恐れるな、ダニエルよ。あなたが悟ろうと心を定め、あなたの神の前で身を低くしたその最初の日から、あなたの言葉は聞かれ、私はその言葉のゆえに来たのだ。しかし、ペルシアの王国の君が二十一日間、私に立ちはだかったが、見よ、首長の一人であるミカエルが私を助けに来てくれた。そこで私はペルシアの王たちのもとにとどまった。

今、私は後の日にあなたの民に起こることをあなたに悟らせるために来た。というのは、その幻はなお多くの日に関するものだからである。

彼がそのような言葉を私に語ったとき、私は地に顔を伏せ、口がきけなくなった。すると見よ、人の子らの姿に似た者が私の唇に触れた。そこで私は口を開いて語り、私の前に立っている者に言った。

ああ、わが主よ、この幻のゆえに私の苦しみが私に臨み、私は力が残っておりません。そもそも、このわが主のしもべが、どうしてこのわが主と語ることができましょうか。

しかし、私にはたちまち力がなくなり、息も残っていなかった。すると、再び人の姿のような者が来て私に触れ、私を力づけ、そして言った、

大いに愛されている人よ、恐れるな。あなたに平安があるように。強くあれ、強くあれ。彼が私に語ったとき、私は力づけられ、言った。どうぞ、わが主よ、お語りください。あなたが私を力づけてくださったからです....

しかし、ダニエルよ、このことばを秘し、この書を封じて、終わりの時まで置いておけ。多くの者が行き巡り、知識は増し加わるであろう。

そのとき、私ダニエルが見ると、見よ、ほかに二人が立っており、一人は川の岸のこちら側に、もう一人はその向こう側にいた。するとそのうちの一人が、川の水の上にいる亜麻布の衣を着た人に言った。「これらの不思議な出来事の終わりまで、どれほどの時があるのでしょうか。」

そして私は、川の水の上にいる亜麻布をまとった人が、右手と左手を天に挙げ、永遠に生きておられる方にかけて誓って言うのを聞いた。「それは一つの時、二つの時、そして半時であり、聖なる民の力を打ち砕いて散らすことが成し遂げられるとき、これらすべてのことは終わる。」

そして私は聞いたが、理解できなかった。そこで私は言った、「ああ、わが主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか。」

彼は言った。「行きなさい、ダニエルよ。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されているからだ。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうち誰ひとりとして悟らない。しかし、賢い者は悟る。」

日ごとのいけにえが取り除かれ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられてから、千二百九十日がある。

待ち望み、千三百三十五日に至る者は幸いである。

しかし、あなたは終わりが来るまで自分の道を行きなさい。あなたは休み、終わりの日に自分の受け分に立つであろう。ダニエル書 10:1-18、12:4-13。